



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1996 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

世を去った人々のために祈る

● 今日、諸聖人の大祝日です。また明日は世を去った全ての信者たちの記念日であり、これを機会に、地上を旅する私たちの最終目的地である天国を見つめたいと思います。「私はあなたたちのために場所を準備しに行く」と、高間で主は弟子たちに仰せになりました。「私のいる所にあなたたちも来させたいからである。私がどこに行くかは、あなたたちがその道を知っている。」(ヨハネ14・2・4) 天国を思い、道・真理・生命であるキリストに従うなら、落ち着きと勇気を与えられ、日常のいろいろな問題に立ち向かいながらもいつの日か、天国の聖人たちと永遠の

喜びを分かち合えるという確かな希望を保つことができるでしょう。「心の貧しい人は幸せである。柔和な人は幸せである。心の清い人は幸せである。平和のために励む人は幸せである。正義のために迫害される人は幸せである。」(マテオ5・3・10) 今日、教会は「大きな艱難を抜けた人々、小羊の血で自分たちの服を洗って白くした」(ヨハネ黙示録7・14) 聖人たちを私たちに示しながら、そう繰り返します。今や彼らは私たちに先だつて天国の喜びに入り、福音の教える徳の模範となつて絶えず私たちのために取りなし、助けてくれます。

● 本日は聖人たちのため、明日は死者のために。教会はこの二日間を典札暦のなかに祈るよう、私たちに招かれます。聖書によれば、この祈りは「復活の考えによるもので、高い良い行ない」(IIマカバイ12・43)であり、諸聖徒の交わりを育て、実現させる誠実で具體的な愛のわざです。私たちが、過ぎ去った世代の眠る世界中の墓地を思い起こします。私たちがそれぞれに自分の愛する人々、私たちが養い、生命を与えてくれた人々のことを思い出す時、この思い出しはよい鮮明なものとなります。しかしそれに劣らざ大切なことは、暴力と戦争の犠牲者たち、キリストへの忠誠を全うするたぬ生命を捧げた人々、兄弟姉妹への寛大な奉仕のうちに亡くなった人々を思い起こすことです。特に、この数年間に亡く

なった人々を思い起こし、祈りを捧げたいと思います。歴史を通して旅する教会は、死んで復活したキリストを宣言する自らの使命が、聖人たちと祝された人々の取りなしによつて支えられていることを喜びつつも、愛する人との別れをいたむ教会の子らの悲しみをも共にし、永遠の生命への希望を与えます。そこには喜びと涙がキリストにおいて一つに統合され、慰めに満ちた確実性を帯びる様子が見て取れます。

● 「すぐれた恩恵のためなのために、天上、地上のすべての他の被造物よりはるかにすぐれ」た(教会憲章53番) マリアに目をむけましょう。諸聖人の元后、キリストの御母、今も天の助けを必要とする教会の子らのために取り次いでください。聖マリア、恩寵の代願者に、二つの大きな祝日に当たつての喜びと悲しみを委ねましょう。(九五・十一・一、お告げの祈りの時間に。)

聖人たちは御国のときが来れ

(聖堂地下にある教皇ヨハネ二世の墓所の前で祈りを捧げられた時のお話。)

クリスマスマスや復活祭のよ

うな大祝日に際して、ローマ司教は「ローマと全世界に」荘厳な祝福を送ります。これは昔からの伝統です。今日、諸聖人の祝日に当たり、思いは「ローマと全世界」に広がります。49年前、司祭の叙階を受けた私は「ローマと全世界」の死者のためミサを行いました。

今日と明日の祝日は、時を超越する教会の秘義について語ります。諸聖人の大祝日は、救われた人々が天国で味わう神との完全な一致を予見させてくれます。世を去った信者たちを記念することで、神と顔と顔を合わせてまみえるにふさわしい者となるため今も清めを受けつつある全ての人々に、目を向けることができます。このように、諸聖人の大祝日と死者の記念は、いわば一つになって祈りへの呼びかけを形づくっているように

す。栄光と賛美の祈り、天国の「テ・アウム」、神の御前で自分たちのことを思いだしてくれようようにと願う人々のための、嘆願の祈り。ここバチカンの丘やローマの古い墓地で、聖ペトロの墓のそばで安らう多くの教皇たち、ローマと全世界の墓地に眠る全ての人々も、私たちの祈りを待ち受けています。

皇たち、とりわけ20世紀を生きたヨハネ・パウロ一世、パウロ六世、ヨハネ二三世、ピオ十二世、十一世、ベネディクト十五世、聖ピオ十世、レオ十三世の墓前で祈ります。諸聖人の通功の秘義のうちに彼らを思い起こし、いまや終わろうとしている今世紀を通じて行なわれた教会への奉仕を心によみがえらせています。兄弟姉妹の皆さん、死せる教皇たちの上に絶えざる光と神の内の休息を祈りましょう。「いつくしみ深い主イエズス、彼らに永遠の安息をお与えください。全ての聖人たちと共に絶えざる光を注いでください。」ポーランド語讃美歌の簡潔な文句は、今日の祝日と死者の記念に関する真理を的確に言い表わしています。

「主よ、あなたの教会を全ての悪から解放し、あなたの愛のうちに完成させてください。聖

化された教会を全地から集めてください。」（「十二使徒の教え」）時を超えて旅する教会、バチカンの丘を中心とする教会は、ローマの教会であると同時に世界の教会でもあります。「ローマと、全世界で。」この聖堂に眠る人々、ほど近いチュートン式墓地に眠る人々を思い起こしつつ、私たちはローマの街路を抜けて、「いつくしみ深い主イエズス、永遠の安息を彼らにお与えください」と繰り返しながら、墓地への巡礼に参りましょう。

ローマを発し、死者の記念は全世界に広がります。まず、ペトロ、パウロを始めとする殉教者たちの記念に満ち、教会の第二の故郷となったイタリア、そしてヨーロッパの国々、アジア、アメリカ、オーストラリアへ、その他世界のすみずみまで、兄弟姉妹たちが私たちと声を合わせて祈る所ならどこでも、今日も明日も、私たちに先だって永遠の生命に入つた人々のために。

とりわけ思いだされるのは、二度の世界大戦の兵士たちや強制収容所の囚人たちが眠る墓地です。この人々の多くは故郷を遠く離れた地で生涯を終え、その場所に葬られました。この数年間に、バルカン半島で内乱の

犠牲となった人々に、特別の哀悼を表します。私たちは誰をも忘れはしません。共に思い起こし、悼み、祈ります。

ローマと世界の墓地への巡礼の締めくくりに、私自身の生まれ故郷であり、親しい人々の眠っている地に心を馳せたいと思います。私の両親、兄弟、親族、先生、恩人、霊的な師、生涯のいろいろな時期に大きな影響を受けた友人たち。祖国の歴史上の重要な場所であり、歴代ポーランド王と偉大な指導者、預言者たちの眠るクラクフの大聖堂をも思い起こしたいと思います。私たちの誰もが、自分の両親や先生、文化を築いた人々、そ

して彼らと愛する人々の眠る場所がいかに大切なものであるかを知っています。私はローマ司教として、精神と心の中で彼らを訪問します。ペトロの座を担った前任者たちばかりでなく、クラクフの司教、枢機卿としての前任者たちをも思い起こし、長年の間、彼らの霊的な遺産に助けられたことを感謝します。「諸聖人の祝日」の聖歌が心に浮かんできます。今日、明日、そしてこの月の間ずっと私たちの唇にのほる歌です。「ゲッセマニで苦しみ、血の汗を流すイエズス、煉獄で弱り果てる靈魂が御身の勇気づけを待ち望んでいます。ああ、イエズスよ！」また、「天の女王、憐

れみの御母。悩み苦しむときの希望。ああイエズス、死んで後、御身にまみえさせてください。ああマリア、私たちの願いを取り次いでください。」今夜、そして明日、ローマと世界の墓地は特別な光に照らされています。墓標の間に灯された明かりは、暗闇を照らします。それは私たち信者にとつて、永遠の光を期待させるものと言っても過言ではありません。その光を私たちは望み、求め、信頼を込めて、愛する人々と私たち自身のために、主なる神が御国に呼んでくださるその日を待ち望みます。アーメン。（九五・十一・一）

内的生活は「司祭養成のかなめ

第二バチカン公会議を振り返る シリーズ⑧

1 待降節を迎えると、新しい典礼暦年の始まりです。キリスト信者の心はいやが上にも救いの希望に奮い立ちます。実にこの季節は、神の御子の託身を祝い、主が日々の私たちの生活に入つてこられること、終わりの日には栄光に包ま

れて戻つてこられることを思い起こす季節です。この確信によつて私たちは未来を信じることができ、現在に責任を持つ覚悟を固めることができます。このように待降節は祈りと改心の時、信仰と愛において成長する時です。

2 第二バチカン公会議についての考察を続けたいと思います。本日は「司祭の養成に関する教令」についてお話しします。誰もが知っているように、トリエントの公会議でも司祭の養成は大きな関心事であり、神学校の設立を決めました。第二バチカン公会議も同様で、神学校はすべての「教区の心臓」（司祭の養成に関する教令、5番）であるとして断言しています。神学校と未来の司祭の養成は、司教のみならず全ての神の民に

とって、不断の関心の的でないければなりません。イエズス自身が願ったように（ルカ10・2参照）私たちも、召し出しという賜を求めて祈らなければならぬのです。しかし、特に必要なのは召し出しにとって最適な環境を用意することです。志願者が聖なる奉仕職に応じるかどうかは、教会を取り巻く状況によって少なからず左右されます。

兄弟姉妹の皆さん。

★ キリストの光は特別な方法で聖人たちを照らし、

教会のおもてに輝きます。（教会憲章1番参照）聖人への崇敬は東と西の教会をつなぐ生きたかけ橋であり、霊的賜の交流を助け、完全な一致への道となります。

西と東のキリスト信者は、互いに競って祝された処女への愛をあらわしているようです。マリアを贖い主の母、教会の母であると認め、神が人間のためになされた数々の不思議なわざの統合であり頂点であると考えているのでしよう。先日、私たちはマリアの被昇天を祝いました。東では、この祝日はマリアの「御眠り」としても知られています。聖母の祝日の中でも最大のもので、信者たちは八日間あるいはそれ以上の断食と祈り

す。深い信仰を持ったキリスト者の家庭、生き生きとした教区、福音に一致した喜びを振りまくグループなどがある所には、召し出しもまた、豊かに現われます。（前掲書2番参照）

3

「司祭の養成に関する教令」には貴重な教えが見られます。そこでは特に、司祭の霊的生活が強調されているのです。「聖なる叙階式によって

をもって、祝日を迎えるので

す。キリスト教的ものの見方の一面が、東の伝統でも当然ながら大きな位置を占める、マリアの被昇天に表われているようです。全ての人間が神の似姿と

聖母への愛は東西教会をつなぐ

して造られたのなら、恩寵に満ちたマリアは「最も神に似た者」であるはずで、人間を三位一体の生命のレベルにまで引き上げようと望まれた神の計画は、マリアの内に実現しました。マリアは「神を見る」ことができました。それは、母とし

キリストに似た者となるように定められた者は、最も深い内的生活において、一生涯友としてキリストと一致する習慣を身につけなければならぬ。（8番）イエズスとのこのような個人的結びつきは、司祭の内的生活、神学的形成、司牧見習期間を統合する原則です。その一方では、ただ神なる師への深い愛のみが、司祭の独身制（西では

て神のみことばのために身体を用意したからというだけではあまり描き出されたとくに、聖母がみことばを永遠に心に育くんでいることによるのです。神の御母への有名なアカシスト聖歌の中

★

西と東

でも、聖人た

ちはマリア同様、教会の大いなる宝です。彼らが世を去った日は、「天国への誕生日」として記憶されています。毎日のように数人の聖人が典礼の中で記念されています。多くの聖人、特に聖書の時代と初代教会時代の聖人は伝統的に東西共通です。

伝統的に義務であり、東では高く賞賛されている）を正当化してくれませう。こうして司祭は結婚を放棄し、「分裂のない愛」をもって神と兄弟たちに仕える者となります。（10番参照）

霊的な形成に加えて、司祭志願者は社会や現代文化と注意深くおだやかに対話することのできる人間的な円熟を促すような資質や徳を身につけなければならぬ。

東西の典礼様式を比べると、互いに補い合う性質のあることがよくわかります。ここでも、相手をよく知ること、正しく理解することが必要です。大聖グレゴリオの場合を思い起こしてみましよう。偉大な教皇グレゴリオ一世は、ペトロの後継者の任務が「神のしもべたちのしもべ」であることをよく知っていました。教皇は東方の信者たちからも高い評価を受け、「対話者グレゴリオ」という前例のない呼び名で記憶されています。この名を聞くと、偉大な教皇の世に知られた業績が心に浮かびますが、同時に聖性と奉仕への道をも示されている思いがしま

★

第二バチカン公会議が先鞭をつけ、キリスト信者の関心事となった教会一致への歩みをマリアに委ねましよう。もし私たちが共通の母の眼差しのもと、また聖人たちの照らす光に従って過去を見直すなら、聖性に満ちた未来を築き、将来には一致することももつと容易になるのでしよう。不幸なこと

に、東と西の関係は暗い影に覆われてきました。しかし、紀元二千年を目前にした今、以前にも増して前向きな姿勢が必要です。至聖なるマリア、教会の模範、生きた秘義のイコンである方、私たちの歩みを導き、支えてください。

（九六・八・十六）

説教・講話・書簡等の抄記

神は正義をもって 世を裁く (ローマ市内の教会にて)

☆ 「人間は一度だけ死んでその後審判を受けると定められている。」(ヘブライ9・27)

本日の典礼には「終末論的」な空気がうかがえます。言葉を変えれば、全ての人の死と、この世の終わりについて語っていると云えましょう。特に審判について。答唱詩篇は「主が地をさばきに来られる」と繰り返して、造られたものは神をたたえよ、「主は地をさばきに来られる。主は世を正義をもって、もろもろの民を公平によってさばかれる」(詩篇98・97)・9)のだから、と呼びかけています。

主が来られても恐れる必要はありません。恐れではなく、天地には喜びが満ち、海は鳴り渡り、川は手をうち、山々は歓呼するのです。(同8)人々もこの喜びの輪に入ります。「豎琴をとって主をうたい、らつぱと角笛の音に合わせ、王なる主のみ前で喜べ。」(同5・6) 神の決定的な訪れはキリスト、人類の終末の希望が成就す

る救いの福音です。この世とそこに住む人類は、もはや死の呪いに縛られてはいません。人類はもはや、永遠にちりに戻る定めではなく、神の御前に立ち、神との永遠の交わりに入り、神の国とその生命にあずかることができるのです。

四終について考えよう

☆ それでも、神の審判という敷居を越えることが必要です。個々の人間の地上での生活は、神の支配下にあるからです。

預言者マラキアはこの真理を手短かにまとめて、「見よ、その日は来る。かまどのように燃え上がっている。すべてのおごる者と悪人は、そののわらとなるだろう。だが、私の名を恐れる者には、正義の太陽が昇り、その翼には、救いがある。」(マラキア3・19・20) ここには火と光という二つの要素が見え、最後の審判の様子と結び付けられています。火は燃え上がり、清めます。光は素晴

らしい神の御顔を照らし、人々を歓喜させます。それでも一人ひとりの地上の生涯が終わるとき、審判は来るのです。その人にとって、死はある意味で世の終わりと言えます。

典礼の一年が終わりを告げようとしている今、「究極の現実」である四終について、死と審判と天国の報い、地獄の罰について、考えてみようではありませんか。これは諸聖人の祝日

この地上に永遠の住居はありません。私たちが待ち望むのは、神の国とその生命にあずかることです。しかし、そのために地上での日々の義務と仕事がおろそかになってはなりません。「新しい地への期待は、現在のこの地を開拓する努力を弱めるものであってはならず、それを励ますものでなければなりません。」

と、世を去った信者たちの記念につながることであると言っても差し支えありません。

☆

ルカ福音書の一節には、終末論的な性格が見取れます。世の終わりというテーマが全てを覆っているわけではありませんが、エルサレムの滅亡が宣告されているのです。イエズスの言葉は「あなたたちの眺めているこれらは、石の上に一つの石さえ残さずくずれさる

日に来るだろう。」(ルカ21・6)これを聞いていた人々は、自分の目で神殿の壮麗さを見ていました。主は遠からず訪れる事態について語っておられたのです。事実、エルサレムとその神殿が紀元70年に破壊されたのはよく知られています。

「先生、それはいつのことですか、その起こる時、どんなしるしがありますか」(同21・7)という質問に答えて、キリストははっきりとエルサレムの破壊を示唆しましたが、それは同時に世の終わりにも関するものでした。キリストは戦争と騒乱を預言し、偽預言者に気をつけるように言われました。「民は民に、国は国に逆らって立ち、大地震が起こり、所々に疫病、ききんがあり、天に偉大なしるしが見られるだろう。」(21・10・11)

ローマ軍によるエルサレムの破壊とイスラエルの降伏の時、ここで言われたような出来事がありました。私たちが歴史の上、他の時代にも起こりました。私たちの生きる今の時代も、多くの戦争と革命を目撃しているではありませんか。人間と人類の歴史は、終末の定めしるしを帯びています。「究極の現実」を指し示す時のしるしは、この地上に永遠のすみかが

存在しないことを私たちに教えます。実に、私たちは来たるべき世界、とこしえの正義と平和に満ちた贖いの時という永遠の運命を待ち望んでいます。

いつの時代もキリスト信者は
試練に直面してきた

☆

キリストの言葉が最初の弟子たちの共同体にも向けられているのは確かです。彼らは困難な試練に耐えなければなりません。会堂に引き渡され、牢に入れられ、キリストの名のために王や総督の前に訴えられました。(ルカ21・12参照)主は付け加えて、「それは、あなたたちが証しを立てる機会となろう」(同21・13)と言われました。キリストは「あなたたちは：地の果てまで私の証人となるであろう」(使徒行録1・8)とも仰せになつています。それはたやすいことではありません。信仰をおおやけに言い表わす者は誰もが、愛する人たちから迫害を受けかねないだけに、非常に困難なことなのです。「あなたたちは両親、兄弟、親族、友人たちからさえも裏切られ、何人かは殺されるであろう。あなたたちは私の名のために全ての人から憎まれる。」(ルカ21・16・17)今、私たちは再びこれらの厳しい言

葉を耳にしています。使徒たちと全教会はそれを聞きながら、立ちふさがるさまざまな試練に向かつていきました。そこには初代教会の信者たちのみならず、現代の私たちが出会う試練も含まれているのです。



キリストが困難や試練を予告なさったのは、弟子たちに対してだけではありませんでした。証人となることの難しさについてお話しになったすぐ後で、「あなたたちは答弁の準備をする必要はない。私自身もどんな敵も抵抗できず、反対もできないことばと知恵を授けるからである」(ルカ21・14、15)と言われます。約束は実現しました。キリストの言葉に力づけられ、教会は歴史を通して歩み、信じる者を導く「逆らいのしるし」(同2・34)となったのです。

さまざまな時と場所で、キリスト信者は敵意の的となり、迫害され、殺されました。それでも彼らは贖い主の慰めに満ちた約束を味わいました。「あなたたちの髪の毛一本さえ失われはしない。自ら耐え忍ぶことによって、自分の靈魂を救わねばならぬ。」(同21・18、19)ももちろんこれは、身体的な生命を救えるという意味ではありません。キリストの偉大な証人た

ち、信仰を証した人々がこの世の生命を全うできなかったことは、殉教者伝を読めばわかります。彼らは大いなる勇気をもって死におもむきました。キリストのために死ぬことで、実際には神の生命の完成に近づくことを知っていたからです。その生命は、キリストの超越しの秘義を通して人類に伝えられたものです。(…)

日々の努力でキリストを迎える

☆ 聖パウロのテサロニケへの第二の手紙には、ある意味で「究極の現実」の預言に匹敵するような重要な一節があります。キリストの再臨を今や遅しと待ち望み、そのために仕事を捨て、日々の義務を軽んじる人々に当てて、パウロは書きました。「あなたたちの中には、むだごとだけに忙しく、働かぬ怠け者があると聞いています。私たちはあなたたちと共

ならぬと命令した。」(IIテサロニケ3・11、10)

パウロがキリストの再臨にじっと目を注いでいたのは確かですが、同時に終末への期待が毎日の義務をおろそかにさせるものであつてはならないことも承知していました。信者にとつて、日々の努力は、キリストの到来に備えるための道なのです。これこそ、公会議文書「現代世界憲章」で最も効果的に述べられている教えです。「新し

い地に対する期待は、現在のこの地を開拓する努力を弱めるものであつてはならず、かえってそれを励ますものでなければなりません。この地上において、すでに新しい世をいくらか表わしている新しい人類家族の共同体が育っている。」(39番)

主よ、私たちが栄光の御国の到来に向け、日々喜びと勇気をもって準備に励むことができますよう、お助けください。アーメン! (九五・十一・十九)

教会の使命と女性

教会シリーズ 38

1 すべてのキリスト信者は洗礼と堅信の秘跡によつて、夫婦は婚姻の秘跡によつて、教会の活動的なメンバーになることができますし、またそうならなければなりません。そこで今回は女性の役割について、いくつかの点を中心に考えてみましょう。間違いなく女性は教会の使命に協力する大切な役割を担っています。

女性は全ての信徒と同様、キリストの司祭職、預言職、王職にあずかり、女性固有のたまも

のを発揮します。女性は女性としての使命を果たすための特別な能力を授かっているからです。

2 女性の尊厳と、女性であることの間人的、神学的根拠を示す使徒書簡「女性の尊厳と使命」と回勅「信徒の召命と使命」に記したことを全て繰り返すことはできませんが、その中で私は、女性も人間として、キリスト者として、社会の中で、また教会の一員として、誰の生活にもある家庭、文化、さまざまな生活状況や活動分

野、喜びと悲しみ、健康と病氣、成功と失敗などの出来事に関わる教会の使命にあずかっていることを述べました。

女性は教会の協力者

一九八七年のシノドスで宣言され、「信徒の召命と使命」で取り上げられた教えによれば、女性は「差別されることなしに、教会生活や協議会など何かを決定する過程に参加すべきです。」(51番)女性は、司教会議や特別の会議だけでなく、さまざまな教区の司牧会議に参加できるということです。シノドスは次のように提案しています。女性は「司牧や宣教に関する文書の作成などにも携わるべきです。家庭、職場、市民社会にあつて教会の働きへの協力者

であると認められなければなりません。」(同)このような場における能力をもった女性の働きは、教会と社会の善のために、知恵、節度、勇気、献身、霊性、熱意を増す上で大いに役立ちます。

3 女性のあらゆる教会活動は常に福音の啓示を反映するものであるべきです。福音書には、人類の代表として一人の女性のみことばの託身への同意を求められたことが記されています。このことを示すのがお告げの場面です。救い主の母になることを承諾したマリアの「なれかし」の後でやつと「天使は去った。」(ルカ1・38)

天使は使命を果たしました。人類を代表したナザレトのマリアの言葉「なれかし」を神に伝え

不変の教え

ることができるようになったのです。

信じた方は幸せとエリザベトが言ったのは、そのすぐ後のことでした。(ルカ1・45参照) マリアの模範に従えば、そしてまた、イエズスがラザロをよみがえらせる前にマルタに信仰告白を要求された(ヨハネ11・45参照)ことを思い出せば、女性信者が特別な方法で信仰を告白し、証しするよう召されていることに気づくでしょう。教会は堅固で忠実な証人を必要としています。今日の社会のあらゆる層に広がった疑いや不信仰に直面して、女性は言葉と行ないで、今も生きておられるキリストを示さなければなりません。福音が伝えるように、イエズスの復活の日、復活の真理の最初の証人となったのは女性でした。弟子たちは疑いを抱き、信じようとしなかったのですが、最後には女性と信仰を分かち合いました。ここにも女性が持つ直感的な特性が表わられています。この特性のおかげで、女性は啓示された真理に心を開き、出来事の意味を把握し、福音のメッセージを受け入れることが容易になります。何世紀にも渡り、このような能力と適性を示す数えきれないほどの証しを見ることが出来ます。

4

女性は信仰を伝えていく上でとても特別なやり方をします。そこでイエズスは、福音宣教のため女性をお召しになったのです。サマリアの女に起こったことがそれでした。イエズスは「ヤコブの井戸」でその女に会い、非ユダヤ地域に新しい信仰を広める者として選ばれました。福音書にはその時の様子が記されています。キリストへの信仰を表明した後で、サマリアの女は人々にそれを伝えようと急ぎました。そして誠実に、情熱を込めて信仰を証しします。「私がしたことを全部話した人がいます。見に行らっしゃい。あの人はメシアではないでしょうか。」(ヨハネ4・29) サマリアの女はイエズスに一つの質問をしただけでしたが、彼女の話しぶりには自分の発見したことへの驚きと真実の畏怖が表われていたため、町の人々をもイエズスのもとへ急がせる結果となったのです。

サマリアの女の行ないに、現代にも通じる女性使徒の特徴的な姿を垣間見ることが出来ます。謙遜に率先する態度、物事を見きわめる方法を決して強制することなしに一人ひとりを尊重する心、同じ信仰の確信に達するために、同じ経験をし、互に互に助け合うことなどです。

5

女性は、家庭の中で幼い子供たちの教育に当たって信仰を伝える機会を持ち、またその責任を担っています。とりわけ子供を超自然の世界の発見に導く喜びあふれる仕事は大切です。母と子供の深い交わりによって、効果的に子供たちをキリストに導くことが出来ます。

しかし女性にとって信仰を伝えていく仕事は、家庭の中だけにとどまりません。「信徒の召命と使命」に記されているように、「いろいろな教育の場においても、(…)神の言葉を信じ、理解し、話し合うことを尊重する全ての場への参加だけではなく、神の言葉の勉強、研究、神学を教える場においても女性が働けるようになるべきです。」(51番) 要理教育の分野で女性が果たすべき役割はこのように示されていますが、今日では昔は考えられなかったほどの広く多様な分野に広がり、実行されています。

6

繰り返すになりますが、女性は理解力と、敏感で同情に富んだ心を持っています。具体的でこまやかな愛を示すことが出来ます。教会の中でも修道者、信徒、家庭の母、独身者など多くの女性が、人々の苦しみをやわらげるために献

身してきました。貧者、病人、障害者など、過去にも、また現在においても社会から見捨てられ拒絶された人々への心づかいが記録に残っています。ちょっと考えただけでも何と多くの人の名前が心から唇へと湧きだしてくることでしょう。家庭や社会の中で、病人に対して、抑圧や搾取に苦しんでいる人に対して女性の手腕や機転で実践される愛のわざと、その英雄的な姿が思い浮かびます。そのどれも神はお見逃しになりませんし、教会は多くの気高い愛の代表者の名前や行ないを証しし、時には聖人の列に加えます。

7

最後になりましたが、典礼への参加も教会における女性の使徒職の大切な領域です。女性のミサ参加はたぶん男性よりずっと多いでしょう。それは信仰、霊的感受性、祈りと聖体を愛する心の表われです。聖体祭儀において司祭や信徒と女性が協力するとき、託身と贖いにおいてキリストと協力した処女マリアの姿を見出し、

「私は主のはしためです。みことばのとおりになりますように。」(ルカ1・38) マリアは託身と贖いのみことばの秘義を世界に広めるための精神と仕事において、女性キリスト信者の模範となりました。

8

イエズスは女性の使徒の傍らで働くことを望まれた

イエズスは贖いのわざの続きを、十二人の弟子と協力者と、その後継者たちに託されました。そして、ご自身もマリアの協力を得てわざを成し遂げられたように、女性には彼らのそばで働くことを望まれました。復活を弟子たちに伝える最初の使者としてマグダラのマリアが選ばれたことが、それを表わしています。この協力が福音宣教のはじまりでした。それは、初期キリスト教の時代から教育活動や研究活動、また文化面での使徒職や社会活動として、小教区や教区、さまざまなカトリック団体における協力として、何度も繰り返されてきました。どの場合でも、「なれかし」の光と、福音が不朽のものとした女性たちの模範は、女性の使命を照らしています。たとえ世に知られなくても、キリストはだれのこともお忘れになりません。頭に油を注いだベタニアのマリアについて、イエズスは言われました。「福音の述べ伝えられるところでは、全世界どこでも、この人の行ないが記念として語り伝えられる。」(マテオ26・13)

(九四・七・十三)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡 講話を解説したものにそのままとる月刊紙 毎月千日発行 定価 一部百八十円 (送料とも) 一年 送料とも一〇五〇円から。詳しくは精選教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393